尿沈渣で中皮細胞を認めたロボット支援腹腔鏡下前立腺全摘除術後吻合部尿漏の１例

◎松岡 拓也[1)]、杉谷 拓海[1)]、八尋 真希子[1)]、中川 美弥[1)]
恩賜財団 社会福祉法人 済生会熊本病院[1)]

【はじめに】今回われわれは，ロボット支援腹腔鏡下前立腺全摘除術（RARP）後に生じた吻合部尿漏により尿が腹腔内に貯留し，尿沈渣で中皮細胞を検出した症例を経験したので報告する．

【症例】70 代，男性．

【現病歴】前立腺癌のため当院で RARP を施行した．3 日前から食欲不振と嘔気が出現したため泌尿器科外来を受診した．退院時と比較して血清 K，BUN，CRE，CRP の急激な上昇がみられ，腹水を認めた．臨床症状および検査結果から RARP 後の吻合部尿漏が疑われたので，精査加療目的で緊急入院となった．

【検査所見】**採血**：K 5.74mmol/L，BUN 73.2mg/dL，CRE 4.39mg/dL, eGFR 11.1, CRP 14.27mg/dL．**尿**：黄色混濁，蛋白 3+，潜血 2+，白血球 3+，赤血球数 31.3/HPF，白血球数 1094.3/HPF，細菌 1+，中皮細胞(+)，K 43.79 mmol/L，BUN 633.5mg/dL, CRE 110.61mg/dL．**腹水**：K 15.92 mmol/L, BUN 208.6mg/dL, CRE 32.90mg/dL.

【尿沈渣】多数の白血球を背景に，中型から大型の類円形細胞が散在性または小集塊状に出現し，一部の細胞はつなぎ目に窓形成を認めた．細胞質は厚く，辺縁はやや不明瞭であった．以上の所見から中皮細胞と報告した．ギムザ染色，パパニコロウ染色でも同様の細胞所見であった．残りの尿で免疫染色を施行したところ D2-40 陽性であり，尿沈渣で検出した細胞は中皮細胞と判断した．

【経過】尿道カテーテルを留置すると 3 日後には採血データが正常化し，外来受診から 7 日で退院した．

【考察】自験例は尿路と腹腔に交通が生じる可能性のある既往歴の存在，尿の腹腔内流入による偽腎不全，尿沈渣による中皮細胞の検出，採血と腹水における K, BUN, CRE データの逆転などの所見が得られ，迅速に診断を行うことができた．RARP における膀胱・尿道吻合部から尿が漏出し，腹腔内に貯留した尿により腹腔内圧が上昇し，吻合部から尿路へ再度尿が流入したと考えられた．

スライドでは，中皮細胞の細胞像を提示する．

連絡先：096-351-8000